

[シンポジウム]

3. 家族病理と家族看護学

—「家族看護学」教育カリキュラムにおける家族の病理性への注目を中心に—

東京大学医学部健康科学・看護学科家族看護学教室

石垣和子

はじめに

「家族看護学」を標榜する講座は、日本において千葉大学及び東京大学に平成4年に初めて発足した。「家族看護学」名の講義は東京大学健康科学・看護学科において平成5年度より開始された。「家族」に関連する、または言及する講義は多分野で持たれているが、看護分野で「家族看護学」と銘打って持たれたのはこれが最初のことと思われる。

先例のない局面で、多くの試行錯誤を重ねてこの3年間「家族看護学」としての適切な講義内容を探してきた経験から、この機会に、これまで考えてきたことを日は浅いながらもまとめさせていただくことにする。「家族看護学」と標榜しなくても、それに匹敵するテーマを長く研究・教育されてきた諸先輩をはじめ、多くの方々のご批判をいただき、「家族看護学」教育を日本に適した内容に組み立てることを目指すものである。

さらに、ここで取り扱うのは、あくまでも学部レベルの講義に関するものであって、大学院レベルや看護の臨床現場に関するものとは異なることを付け加えておきたい。

1. 学部教育における家族看護学の原点

近年、在宅ケアが声高に叫ばれているが、「人は生きてきたように死ぬ」、これは経験豊かな訪問看護婦の言葉である。家族との関係は、死の間際であるからといって、おいそれとは改善しにくいことを

実感させるものである。ということは、死の間際でない場合においてはなおさらであろう。筆者も保健婦時代には、家族をユニットとして捉えようにも、あまりにもその人間模様が多様で複雑であることから、現実的には簡単ではないことを実感してきた。ユニットとして捉えることが、柔軟な対応を妨げる可能性もあることを感じる場合もあった。

別の観点では、家族という関係でなかったら問題なかったであろうに、家族であるがために相互に束縛しあったり、介入したりすることによって苦しんでいる家族員にも多く接した。

そのようなことを考えあわせ、まずは家族の成り立ちの理解や家族にこだわる人間のありように対する理解を深め、人間形成に及ぼす家族の影響を知ること、そして解決の方法論まではいかずとも、出現した問題の根を洗い出し、家族関係の中で傷ついた個人を支援し、家族の再生を図る方策を学習することが看護の学部レベルでは必要な教育なのではないかと考えた。そのためには、現代ではどの家族にも潜在的に孕みがちと思われる病理性に着目することによって、学部段階の学生でも我がこととして捉えることができ、興味を持って学習できるのではないかと考えた。

2. 家族看護学教育の内容

次に、2で述べたようなことを教育するのに必要な内容はどの様なものであるかについて触れる。

1) 家族の誕生と成立

顕著な例としては、「アルコール依存症の親を持

つ娘はいずれアルコール依存症になる人と結婚しがちである」という場合のように、まずはリスクを孕む家族の誕生に着目する必要があるであろう。つまりアルコール依存症の親を持つ娘は、結婚前からアルコール依存症となるような夫と結婚する傾向を原家族で育成されて備え持つており、夫となる人は自分の人生を引き受け世話を焼いてくれるような形質をそなえ持った女性を必要としていた、ということで、自分の意志で選択したようであつても宿命的な結びつきであつたというわけである。多くの結婚のきっかけとなる“好きという感情”や“愛する”という感情は、“自分が相手を必要とするかどうか、相手が自分を必要とするか”と密接な関係にあり、無意識下でのそのような判断と選択が家族の誕生に大きく関与していることを理解することが大切である。

さらに、家族の素材である一人の男あるいは女が問題や矛盾に満ちていることを指摘し、そもそも家族の成立自体の危うさに注目するすることが大切である。

2) 家族という制度について

家族の歴史をひもとくと、以前はずいぶん違った家族形態をとり、そこで尊重されていたことも現在とは異なつていたようである。どの様なイデオロギーが主流か、文明がどの様なものであるか、宗教はどうであるかなどによつて家族がどうあるべきかの価値観が異なることからすると、長期的観点からは、現代日本の家族がこだわっている問題はかなり一人相撲的であることが証明されるのではないか。しかし、自らその問題にこだわりたいし、その中でより幸せな家族に到達したいというのが日本の一般的な傾向と思われる。またそのような家族であることを利用し、後押しするのが現体制であるということもわきまえておかなければ、苦しみ、悲鳴を上げている家族あるいはそのスケープゴートである家族員の気持ちは理解できないであろう。

3) 家族病理の発生要素

個々人の持つ生来の資質があるとすれば、それは家

族病理の根源として無視できないであろうが、その点に関してはどこまでが生来のものか、どの点が後天的かは判然としない。しかし、それを見分けることに労力を使うよりは、家族の中で育まれる後天的な資質が家族病理の母体として重要であることは多くの例で示されている。さらに、そのような個人がある別の個人と家族を成すに至る必然性、原家族から受け継いだ資質が新家族内に内包されることによつて発揮される介入や阻害が、いかに深く、長期的なダメージとなるか。この様な点についての教育は家族に起こつた現象を理解するには不可欠だと思われる。看護職対クライアント関係において、そこまでのことを問題にできる関係性は、通り一遍のやりとりではむずかしく、看護職側にそれに対する見識と洞察力が備わつていなければならない。

また、時代性による家族への期待の違いも重要なことであろう。生きる糧を得る時代は遠くに終わり、より良く、より幸せにと求める時代だから。しかし、幸せほど相対的なものはないであろう。もつと幸せそうな家族があるから不幸を感じる家族があり、より不幸になればそれ以前を“まだ今よりは幸せだつた”と感じる。手本を他に求めることや家族はこうあるべきという規範に縛られることによつて、背伸びし、家族至上主義におちいり、結果として家族の病理性を拡大し、破綻にまで至らしめるように加担しているとは言えないだろうか。また、情報化時代ではテレビで描く家族像などに理想を求め、それとの比較で実生活レベルの家族をも評価しがちであることなどにも関心を払うべきではないか。学部レベルにおける「家族看護学」教育ではこの様な内容も含める必要がある。

4) 家族の個別性の尊重

家族の病理性の顕在化の根底には、“より幸せに”“より理想的に”と向かうよその家族との引き比べや、それに対する裏返しとしての自分の家族の否定が多くある。社会にも家族を類型化し、あるタイプに理想を見つけ、押しつける傾向がある。家族のありようの自由を保障し、家族のありようを拡大する視点

を持ち込むことによって、悩める家族のストレスを軽減し、我が家族を見直し、自ら再生への過程に踏み込む可能性が高まるのではないかとと思われる。

終わりに

家族はユニット、家族単位という捉え方で、ユニット内のダイナミクスを考慮し、家族員間の理解、協力を促し、足りないところは看護職や社会資源などで補うという考え方は、いろいろな領域の看護教育でも取り組まれており、家族を取り扱う技術という点では有効で重要なことである。それに対し、ここで取り上げた新発足の「家族看護学」は、家族員それぞれの持つ原家族体験を考慮した上での理解を深め、現代の家族の陥りやすいジレンマに気づき、看護現場における問題解決をさらに促進しようと意図

する内容である。

悩める家族は、不幸を一身に背負い込んだと思いがちである。そのような家族を支援するには、“現代では他の家族にも不幸の芽は存在し、量的にどの程度意識化されたかの差に過ぎない”という、どの家族にも潜む病理性があることや他の家族をうらやむことから再出発はしにくいことを伝えることが大切と考え、当学科の学部レベルの教育ではそこに重点をおくことを試みている。学生からは、“他では経験したことのない引き込まれるような内容の授業である”と非常に高い評価を得ている。

参考文献

- 1) 齊藤 学：魂の家族を求めて；日本評論社，
- 2) 齊藤 学：「家族」という名の孤独；講談社，
- 3) 山田昌弘：近代家族のゆくえ；新曜社，1994
- 4) 牟田和恵：戦略としての家族；新曜社，1996